

マイルズ・フェアバーン「断片的な証拠からの一般化の問題」

Miles Fairburn, “The problem of generalising from fragmentary evidence”, *Social History: Problems, Strategies and Methods*, Macmillan, St. Martin's Press, 1999, pp. 39-57 (chapter2).

紹介

本論文は、科学哲学の議論を用いて歴史家の研究で実践されている方法を分析した『社会史——問題、戦略、方法』の第二章である。断片的な証拠（事例研究）から集合性に関する主張を論証する際に生じる問題と、そうした問題を制御する方法について論じられている。

○導入部¹ (p. 39)

- ・社会史では、集合性(collectivity)に関する主張を裏付けるために、断片的な証拠から一般化することはいたって普通の方法である。ところが、この方法には次のような問題がある。①典型性の問題 ②代表性をもたないデータを使用する問題 ③個別から一般化の問題 ④個別から一般を論証する問題 ⑤既知の少数を参照して未知の多数を証明する問題 ⑥部分から全体を類推する問題 ⑦既知から未知を推測する誤謬 ⑧帰納法の問題 ⑨印象に基づく証拠、あるいは逸話的な証拠の問題 ⑩例によって論証や証明をおこなう問題。

➡本章で論じられるのは次の三点。

1. 断片的な証拠から一般化することがポピュラーな理由。
2. この方法だけが用いられると主張が信頼できないものとなり、ある場合には、深刻な結果を引き起こすこと。
3. こうした弱点を制御するための基本的な手続きと戦略。

○大きな集合についての主張を少数例から証明しようとするのはなぜか (pp. 39-41)

- ・①もっとも使いやすい方法だから。②徹底した調査の末、たとえばサンプルの 12 人がみなある特徴をもっていることを発見したとすると、この 12 人が属する集団のほとんどが同じ特徴を持っていると推論するのは理にかなっているように思われる。③多くの人が代替案として大規模な数量化(mass quantification)しかないと信じている。④少数の選り抜かれた例は、統計だらけの本よりもずっと読みやすく過去について多くの見識を与えてくれると信じている。⑤この方法が有力で、うまく機能しているように見える。

¹ ○で表記した小見出しはレポート作者が付した。

た「古い」歴史学からの実践を引き継いでいる。

➡だが、主要な理由は、歴史家がほかに選択肢がないと感じていることである。

- ・断片的な証拠のタイプは次の三つに分類される。

①完全な、あるいは体系的な断片(a complete or systematic fragment)

➡諸事例のすべて、あるいは大多数で構成されている断片。大きな人口のうち、〔同じ〕サブユニットに属する人々。(e.g. あるひとつの村のすべての人)

②散り散りの断片(a dispersed fragment)

➡大きな人口のうち、それぞれの分散したサブユニットから引き出された事例のプール。

③混ざりあった断片 (①と②の混合)

○例による論証の問題点 (pp. 41-46)

- ・次の六つの条件が重なり合うことで問題が生じる。

①諸事例の大きな集合を研究する場合。

②大きな集合を構成している事例の多くについて何も知らない場合。

③知られている、あるいは、知ることのできる諸事例が集合の断片である場合。

④断片、つまり、大きな集合のうちで知られている少数の事例を、集合全体についての主張の証拠として用いる場合。

⑤断片を構成する少数の事例が、集合全体の典型であるという合理的な見通しを論証していない場合。

⑥主張を裏付けるのにこの方法に依存している場合。この方法が唯一の確証装置であるか、あるいは、ひどく欠点のある他の確証方法によってしか補われていない場合。

➡少数の例が知られていないすべての事例の典型であることを、明確に/蓋然的に証明するか、あるいは、主張を確証する付加的な方法を用いるのでなければ、主張は信用できるものにならない。

- ・断片的な証拠の問題は、ローカルな事例研究によって解決されるか？

- ・ローカルな事例研究が近年後押しされている理由は、国のレベルではデータが断片的でも、ローカルなレベルでは十分にあるという状況に関係している。しかし、次のような問題がある。

①少数の地域を深く研究しても、個別からの一般化の問題は解決されない。

➡調査された少数の地域が調査されていない多数の地域の典型であるかはわからない。

②個々の歴史家に固有のやり方 (individualistic practices)が、標準化されたデータ、比較可能なデータのプールを一般化することを妨げている。

➡人口史家やアナールの歴史家を除けば、たいていの歴史家は同じ問いかけをせず、同じ方法を採用せず、同じ理論的傾向をもつことなく、データを提示するのに同じカテゴリーを用いることもない。(e.g. 過去、2, 30 年の間に、植民地期ニューイングランドのタウンについておこなわれた 25 件の研究があるが、典型的なニューイングランドのローカルコミュニティとして、それぞれが異なるモデルを生み出してしまった)。

- ・例による論証の問題が深刻にならない状況もある。
 - ①自明な事柄の場合 ②些細な事柄の場合 ③全体の議論の中で小さく本質的でない要素でしかない場合 ④推測でしかないと主張する場合 ⑤全体の議論にとって重要ではあるが、他の争う余地のない研究によってもたらされた証拠と一致する場合
- ・しかし、全体の議論にとって重要なだけでなく、大胆で野心的で興味深い論点、つまり、独創的であったり、通説に挑戦するような論点を裏付けるために例による論証に依拠する場合には、それが成功するかどうかは運に左右されることになる。こうした状況では、例による論証は、次の二つの理由から証拠的な力が弱い〔これを著者は、「正の負債」(positive liability)と呼ぶ〕。
 - ①論点を裏付けるために用いられるそうした証拠は、本質的に不確かなものである (inherently indeterminate)。
 - ②そうした方法は、主張を実質的に無防備にしてしまうくらいに弱い。一次史料のなかに反例を見つけ出すことは難しくない。

○この弱点の具体例

- ・ L. Davidoff and C. Hall, *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*. この研究では、バーミンガム、エセックス、サフォークの事例研究に基づく主張が、イングランドの残りの地域にも適応できるとされている。

- ・ この研究の論点は次のように整理される。

女性は、家族企業の成長にとって「本質的に重要」(vital)であり、男性の上昇を「下から支えた」(underpinned)。なぜなら、女性は、①子供の養育と訓練を無償で提供し、②家族企業における無償労働の源であり、③自給生産と副業(服の仕立てや裁縫など)に従事し、④住み込みの従業員を無償で監督し、⑤金融資本の直接の供給者であり、⑥仕事のコネと専門的な技術をもたらし、⑦家族の信用を維持する体面を表わしたからである。

- ➡①の主張は自明であるとして受け入れることができる。②③④の主張も背景知識から受け入れることが可能である。だが、⑤⑥⑦の主張はそうではない。こうした挑戦的で重要な主張を実証するのに、少数の例に頼るのでは、効果的に主張を受け入れさせることはできないし、容易に納得させられない研究者が反例を見つけてくる可能性もある。

- ・多くの研究者が例による論証に依拠しているが、居心地の悪さを感じており、さまざまな方法でこの論証を強化しようとしてきた。

○例による論証は強化することができる (pp.47-56)

方法①：専門家の証言に依拠する

- ・その当時における専門家の観察を引用する。ここでの専門家とは、訓練を受けていたり、直接経験したことで、当該分野についての観察を信頼できる詳しいものにすることができる人のこと。
- ・すべての専門家の証言が当てになるわけではないが、批判的に評価し、いわゆる内的本文批評(internal textual criticism)といわれるテストにかけることで、彼らの証言をかなり信頼できるものにすることができる。内的本文批評は、次のような問いを史料に投げかけることでおこなわれる。

- ①それぞれの専門家の観察のうちに、内的矛盾はあるか
- ②その専門家には、誤った観察や、信頼できる観察をした前歴はあるか
- ③その専門家は、観察している状況にどのくらい近いのか
- ④その専門家の価値観や興味は、観察の結果に沿っているのか、逆らっているのか。もし逆らっているのであれば、観察にバイアスがかけられている可能性を排除することができる。もし沿っているのであれば、その可能性を排除することができず、信頼性を疑ってかからなければならない。
- ⑤価値観や信条の異なるほかの専門家が同じような観察をしているか
- ⑥観察が本来的に妥当であるか

- ・専門家の証言に依拠するのが妥当な二つの理由。
 - ①歴史家のゲルトルーデ・ヒンメルファーフによれば、専門家が無名の大衆を代弁すると考えることはできないが、歴史家はそうした専門家よりも有利な立場にあるわけではないので、同時代人のよく考えられた判断を無視できる余裕はない²。
 - ②歴史家がこうしたアプローチを採用するとき、ある意味では人類学者がフィールドワークをするのと同じことをしているのである。社会史家が大きな集合に関するデータを求めて専門家の証言に向かうのは、フィールドにおいて人類学者が知識をも

² Gertrude Himmelfarb, *The New History and the Old*, Belknap Press of Harvard University Press, 1987.

つ少数の「ネイティブ・インフォーマント」に頼ることで、部族全体の習慣に関するデータを得ることと大きな違いはない。

○この方法の具体例

- ・ J. J. Tobias, *Crime and Industrial Society in the 19th Century*
- ・ この本が出版された頃、大規模な数量化(mass quantification)が社会科学の分野で隆盛を極めており、トビマスもこの流れにのるプレッシャーを感じたに違いないが、犯罪統計を史料として用いることは困難だった。なぜなら、19 世紀イギリスで記録された犯罪件数はまったく信用できないものだったからである。そこでトビマスが利用したのが当時の専門家の証言だった。その当時における、刑務官、更生施設の役人、治安行政に関する調査委員会など。これらはトビマスにとって「強力な権威たち」(powerful authorities)であった。

➡しかし、この戦略には欠点があった。トビマスも認識していたのだが、こうした権威たちの幾人かが依拠していたのは、直接の観察ではなく、信用できない犯罪統計だったのである。さらに、証言にも大きな食い違いがあった。

- ・ 専門家の情報の信頼性は少なくとも次の三つの変数に依存している。

①専門家がどのように情報を得たか

➡典型的かどうかわからない少数の事例や、直接の観察に基づかない情報は疑わしい。

②集合の大きさとその分散

➡限られた地域に住む 300 人の部族のネイティブ・インフォーマントは、その部族の習慣について正確な知識を持っている可能性は十分にある。しかし、一つの地位に居続けた「強力な権威」が、19 世紀イギリスで罪を犯した膨大な人々の数を知っていると想像するのはおかしい。

③専門家にバイアスがかかっている可能性（一番重要）

➡観察はイデオロギーや価値観、利害関係などによってゆがめられることがある。

- ・ こうした本質的な欠点がすべて存在する場合に、それを受け入れることが可能なレベルにまで小さくすることは可能だろうか？

➡たいていの場合は不可能だろう。専門家の証言を検討することで、健全な証言を取り出せる場合というのは、結局わずかしかない。

方法②：常識(common sense)に依拠する

- ・ 常識、あるいは哲学者が言うところの「民族心理学」(folk psychology)、「民族意見」(folk opinion)、「民族理論」(folk theories)、「日常推論」(everyday reasoning)に訴える。

- ・ 常識の定義：広く共有された吟味を欠いた知識(widely shared unreflective knowledge)。社会史家があからさまに常識に依拠することはまれであるが、例による論証を用いる場合、しばしば明記することなくこの方法に依拠しており、そのことを必ずしも自覚していない。

○この方法の具体例

- ・ Keith Thomas, *Man and the Natural World*
- ・ この研究の主張は、イギリスでは 16 世紀と 19 世紀初頭の間、自然に対する態度が変化していったというもの。
- ・ トマスは例による方法でこの主張を論証しようとしているが、例の典型性の問題ははぐらかされてしまっている。
- ➡たとえば次のような主張が問題。都会化が地方生活に対するノスタルジアを下から支えた。そうしたノスタルジアはエリートだけでなく、商人や小売店主にも影響を与えた。
- ・ トマスの議論は次のように構成されている。
 - ①ノスタルジアの原因を仮定する。1. 18 世紀のイギリスでは都会化が急速に進み、1800 年までにオランダを除けばヨーロッパでもっとも都会化が進んでいた。2. 大都市（特にロンドン）が人口過剰になり、非常に汚く、不衛生になっていた。3. この時期の文学は都市を道徳的に墮落した場所、地方を道徳的に純粋な場所として描く強い傾向があった。
 - ②トマスは、こうした原因が地方へのノスタルジアを生み出したと推論する。
 - ③4 人ほどの書き手の証言を引用することでこの推論を裏付けする。さらに、状況証拠を用いる。この時期に地方について書く人が増えたこと。夏に地方に小旅行に行く都市民の傾向など。
- ➡しかし、状況証拠は弱い。人々がこうしたことを好んだ理由が、①の原因と一致しているということは示されていない。トマスは最後に議論を突然近代世界に向け変えて、常識に訴えることで主張を強化しようとする。つまり、都会文明は都会の居住者を地方暮らしに対して感傷的にするというわけである。
- ・ 常識に訴える方法の長所と短所。
 - ①長所：常識「知」は、しばしば人間の信条、行動、欲望についてのもっともよい説明を与えてくれる。わたしたちの「民族的信条」(folk beliefs)の多くはうまく機能するし、間違いであるとは思われないか、あるいは少なくとも完全な間違いであるとは思われない。
- ➡もしそれらがうまく機能しなかったとすれば、それらは時の試練に耐えなかっただ

ろうし、迷信として信用されなくなっていただろう。

②短所：一方、常識「知」に反対するさまざまな議論が存在し、それらはとても強力である。(たとえば、「そうした知識はどれも体系的で厳密な検証の対象にならない」、とか「常識と思われていることは、文化的に特殊なものであるという傾向が強く、社会によって本質的に異なっている」といった反論がある)。

→結局、過去の社会の研究に常識を持ち込むと、人々のものの見方を完全に誤解する可能性がある。

本章での議論はさらに第三章に続く。次のレビューをご参照ください。
